

## 慶應 SFC 学会 (A) 研究成果発表 (学会発表)

### 成果報告書

森野純夏 (慶應義塾大学 健康マネジメント研究科 修士課程 1 年)

#### ■ 発表概要

##### - タイトル

子どもの居場所における専門的支援の必要性-攻撃的行動をとる児童への対応実態から

##### - 発表形式

口述発表

##### - 学会

日本 NPO 学会 (<https://janpora.org/>)

日本 NPO 学会第 25 回研究大会 (<https://janpora.org/meeting/>)

##### - 参加期間

2023 年 6 月 10 日～6 月 11 日

#### ■ 研究概要

子どもの居場所は国や自治体の貧困・孤立対策として位置付けられ、設置数が増加している。しかし、具体的な機能や、特別な配慮が必要とされる問題提起行動がみられる児童へのサポート体制は十分に明らかになっていない。このことを受けて本研究では、子どもの居場所を対象に、児童の問題提起行動、特に攻撃行動がみられた際の、スタッフの対処行動やその意図、スタッフ組織の支援体制を構造化することを目的として調査した。具体的には、子どもの居場所の意義、課題、子どもの攻撃行動の機能、リスク、保護因子、介入支援を先行研究から整理した。その上で、子どもの居場所のスタッフへのグループインタビュー及び、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた分析を行った。

#### ■ 研究成果

調査は、国や自治体から子どもの居場所に関する助成を受けている 3 事業所のスタッフ計 11 名へのインタビューを行った。児童の攻撃行動がみられた際の状況に関する半構造化面接を行い、その内容を M-GTA によって分析した。その結果、子どもの居場所においても、先行研究と重なるような児童の攻撃行動が見られ、それに対しスタッフは、既存のソーシャルワーク援助技術に近いサポートを行っていた。直接支援に加え、他支援機関との連携や情報交換といった地域内での間接支援も行われており、コミュニティソーシャルワークの機能を果たしていることも示唆された。更に、Child

Behavior Check List の評価では、インタビュー中に登場した 7 名の児童全員が何らかの行動得点で臨床域に達しており、子どもの居場所内に専門支援が必要とされる児童が存在するとの定量的な結果も得た。またスタッフの児童への関わりは、個人的信念、役割、状況との対話の中で行われていること、同時に、組織内の共有知識が構築されていく反省的実践の特徴も示された。

本分析より子どもの居場所は、我が国の貧困・孤立対策の中でも、将来的なリスクを有する子どもへの予防アプローチとしての意義を持つことが示唆された。また、子どもの居場所をより機能的にしていくためには、単に数を増やしたり研修を行うだけでなく、子どもとの関わりの不確かな環境の中でも実践しながら学習していける組織の体制づくりが必要であるというインプリケーションを得た。

#### ■ 研究成果の活用

本研究では、今後の課題として「子ども支援現場で支援者と子どもの関わりについてのより詳細な記述による分析の必要性」「リスクの予測因子を持っていた成人対象のケースコントロール研究による、リスクの保護因子の可視化」「一般化を高めるための、子どもの居場所と利用者を対象とした横断研究」が挙げられた。これらの課題をもとに、修士論文で更なる研究を進めていく。